

日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」

―陸路を行く 現代語訳・解説(二)―

神崎 直美

はじめに

本稿は前号の続編で、日向国延岡藩内藤家(譜代、七万石)の藩主政順の夫人であった充真院が執筆した「五十三次ねむりの合の手」について、現代語訳と解説を試みたものである(1)。対象とした箇所は文久三年(一八六三)四月十一日の前号の続きの記述から、同月十四日の途中までである(2)。地域としては相模国の箱根越えを終えて関東を離れ、伊豆国を通過して駿河国を進み、大井川を渡り遠江国に足を踏み入れたところまでである。

旅を始めてから早くも六日から九日を経て、充真院をはじめ同行者たちも疲労している様子が窺われる。それゆえであらうか、記載の位置が不適切な部分がわずかとはいえ存在する。充真院は延岡に到着してから紀行文を執筆することを予定しており、そのために道中で備忘録をつけていた。備忘録に書き留める際に配置が乱れ、それが後に紀行文をしたためる際に影響したのであらう。

旅の日々において、かつて充真院が書物を読み、または人から聞いて知り得た駿河国の名所というべき景観や名物を、東海道を進みながら自らの目で見て心で感じる体験を重ねている様子を、以下で見てみよう。

一 伊豆国から駿河国へ

① 四月十一日・続き (六日目) 宗閑寺で小休憩

原文 程なく、山中宗閑寺といへる小休に来る、山中の事にて座敷次杯は板はり杯有て、むさくるしく、寺の事故、何事もととかす、やうやう次向上へあかるくらひ、いつも上げしとて、赤飯に煮染そへ出し、少し空腹にも成し事、好物故嬉敷たへし所、けふりくさくて一口もたへられず、お光は山中いねふりしゆへに、かこの戸明ると、ちこわも損しちらし髪、其うへ寒く候はんさるとう着を上に着、たわひなくふし居しまま、皆おこせと心付すとふせし物哉と、やうやおこして行を、駕籠の人に見せしと心つかひす、

現代語訳 まもなく山中という地にある宗閑寺で小休憩をした。山の中にある寺なので畳を敷いた座敷が少なく、次の間やそれ以外の部屋などは板張りでやぶった。そもそも寺なので、万事において本陣のようにには行き届かない。私の身近な御付の者はようやく次の間に入室できたが、他の者たちは上がる部屋が無く戸外で休憩した。寺は私たちに、赤飯に煮染を添えて供してくれた。これらは寺が来客にいつもふるまう品であるそう。私は少し空腹を覚えていたうえ、赤飯と煮染は好物なので嬉しく思い口にしたが、燻されたような味でそれ以上は一口も食べられなかった。

光姫は山の中の道を進む間、駕籠の中で居眠りをしていたために、宗閑寺に到着して駕籠の戸を開くと、稚児輪に結っていた髪がばらばらにほどけていた。さらに、光姫は寒かったため下着である胴着を着物の上に羽織り、正体も無く眠り駕籠の中に横たわっていた。御付の女中らが光姫を起こそうとしたけれど、光姫は倒れ込む程眠っていたので起こすのに手こずった。身繕いが乱れたままの光姫が駕籠から降りて座敷に向かう姿を、駕籠を運んでくれた男性らに見せたくないと思い、私は氣をもんだ。

解説 箱根から伊豆へ向かう東海道は、山の合い間を下りながら進む。山中とは間の宿の山中新田のことである(3)。

充真院一行は小休憩の際に当地の御小休本陣の笹屋を利用せずに、笹屋から少し下った位置にある宗閑寺で休憩した⁽⁴⁾。思いがけず笹屋に予定外の先客がいたのであろうか。宗閑寺は山中城の三の丸の裏手に位置する浄土宗寺院である。内藤家は浄土宗を崇敬しており、関東総本山である光明寺にとって大檀那なので、事前に光明寺が宗閑寺に充真院一行が休憩のために立ち寄ることを連絡して配慮を依頼することも可能である。しかし、休憩した際の様子からは、充真院一行は宗閑寺から特別に丁寧な接待を受けていない。光明寺側から宗閑寺に事前に充真院一行が小休憩をすることについて連絡をしたようには思えない。この度の旅は急に出発したため、光明寺の内藤家墓地に参拝することも叶わなかったという。したがって、光明寺からの依頼により道中で浄土宗寺院に立ち寄ることを連絡して便宜を計ってもらう余裕がなかったであろう。山中城の辺りは富士山が美しく見える地であるが、充真院の記述には富士山についてはふれていない。明確な理由は記載していないが、充真院はこの地で富士山を見る機会がなかったようだ。

宗閑寺へ到着して光姫が乗っている駕籠の戸を開いたところ、光姫が駕籠の中に横たわり正体無く眠っていたこと、稚児輪に結っていた髪がばらばらに乱れていたこと、さらに防寒用下着である胴着を上着の上に着ていたことなどがわかり、充真院は光姫の姫君としてはふさわしくない姿を恥ずかしく思った。日頃、光姫にしつけを施していた充真院にとって、そして身分制社会を生きる上流階級の人物の矜持として、光姫の姿と行為はだらしなく、残念極まりなかった。

② 三嶋明神を参詣する

原文 ここもそこそこにして、下りに段々成にしたかひ家数も多くなりて、立つつく比に石敷し有もなく、物売ふ家抔も多くなりて、三嶋の宿につきぬ、もはや明神前に成しとの故、少し昼には早候はんまま三嶋明神へ参詣致度、先供は行過しまま、有合したる人のみにてよくと駕籠よりおりて、御門のうちは竹の生かき、明神様普請さい中とて御かり

家也、ふしおかみ、末社之方に庭鳥多くおりて、鶏をつらまへ見んとて少し遊び、是よりすぐに徒歩にてゆかんと思ひしかと、お光なり悪く候ゆへ、又駕籠に乗て昼休迄ゆきぬ、

現代語訳 宗閑寺での休憩は短時間で終わりにして、さらに山の合い間の坂道を下って行くと、進むにしたがい家の数が増えた。家が道に立ち並ぶ所まで行くと、箱根路の石畳が終わり道沿いで商売をしている店が多くなり、宿場町の三島についた。ここは既に三嶋明神の門前であるという。昼食にはまだ少し早いので、三嶋明神を参詣したと思った。

先行して進んでいた御供たちは既に三嶋明神の前を通過してしまったので、私は「今、ここに居る者たちだけでかまわないので参拝しましょう」と言い、駕籠から降りた。三嶋明神の門から境内を見ると、両側に竹の生垣が見えた。三嶋明神の御宮は再建工事の最中で、仮の御宮であった。仮の御宮の前で、私は伏し拝んだ。末社の方には鶏がたくさんいたので、同行者らと鶏を捕まえようと戯れて少しばかり時を過ごした。三嶋明神の参詣を終え、ここからすぐに歩いて進もうと思ったが、光姫の身繕いが整っていないので、再び駕籠に乗り昼休みをする場所まで進むことにした。

解説 三嶋明神とは現在の三嶋大社のことである。正面の大鳥居の前に東海道が東西に通っているの、充真院一行は歩を進めるうちに門前に着いたのである。当初は参詣する予定ではなかったが、充真院の希望で急遽参詣した。建設中で仮の御宮であったのは、境内の建物のほとんどが嘉永七年（一八五四、安政元年に改元）十一月四日の安政東海地震で倒壊し、再建中だったからである。なお、社殿―本殿・幣殿・拝殿からなる権現造。御殿と称す―は慶応二年（一八六六）に再建された⁽⁵⁾。充真院らは末社の辺りにいた鶏を追いかけて遊ぶなど、短時間とはいえ楽しい時間を過ごした。三嶋明神の正面の門、太鼓橋とその左右に広がる神池、中門、御宮などを、充真院は簡単ながら挿絵として描いた⁽⁶⁾。

③ 居眠りしながら三島から沼津・原へ

原文

我は駕籠にのりてたへすいねふりしては、うしろの方へとんとあてるゆへあふなく、泰三郎駕籠わきにて聞、とふかふとんやうなるかふり候様にと氣を付くれ候、我も左様になさはやと、只今いひし所あてしにて、うしろのつむり余程はれいたみこまり申候、是よりは手ぬくひにてもかふり候はん申居ぬ、我にてもあてましとは思ひつれとついついあてる也、夫にて度々めさむる時と有、初ての旅前よりのつかれにて、髪指を落し候者杯も多く有、我はほうつ故、髪の損し候と云事もなく仕合と思、ここを立出、沼津にかかれは、長き松原のうち、弥次・幾太八之事思ひて、定めしここにしておかしき事あらん杯思て、

現代語訳

私は駕籠に乗ってから常に居眠りをしていたので、体が揺れて駕籠の後の部分に「とんとん」と音がする程強く後頭部を打ち付け危険であった。その音を警護のため駕籠の横に付き従っている家中の男性四人のうちの一人である泰三郎が聞きつけ、「どうか布団のようなものを頭にかぶってください」と、駕籠の外から私を氣遣って声をかけてくれた。私も「そのようにしましょう」と返答したと同時に、また後頭部を駕籠にぶつけた。後頭部がかなり腫れて痛み、私は困ってしまった。「今から頭に手拭でもかぶります」と、私は駕籠の中から泰三郎に伝えた。後頭部をぶつけないようにしようと私は思っているのだが、思いに反してぶつけてしまう。そのため、度々ぶつけては眠りから目が覚めた。私たちにとって初めての長旅である。江戸屋敷を出発してから今日までの疲れのために、女中のなかには簪を落した者が多くいた。私の髪型は「ほうつ」――坊主――なので、皆のように結い上げた髪が乱れず幸いと思った。三島を出発して沼津まで来ると長い松原――千本松原――がある。かつて読んだ『東海道中膝栗毛』の主人公である弥次郎兵衛と喜多八の事を思い出した。二人はきつとこの辺りで面白い事をしたのであろうと、思いめぐらした。

解説

旅をはじめて六日目になり一行は皆、疲れきっていた。その様子は充真院が駕籠の中で居眠りを繰り返し、睡魔に勝てず後頭部が腫れて痛むほど何度もぶつけていることや、多くの女中が髪に挿していた大切な簪を落してしまっ

たという具体的な描写からよくわかる。充真院の駕籠の横に護衛として付き従っている泰三郎―佐久間泰三郎恭明―と充真院のほのぼのとした会話は、この紀行文の見所でもある。当時、泰三郎は充真院様御用達・御姫様御用達兼帯を勤めていた⁽⁷⁾。充真院が居眠りをしているうちに、一行は駿河国の沼津に来ていた。充真院は沼津の千本松原を目にした折、弥次郎兵衛と喜多八の珍道中の『膝栗毛』、すなわち『東海道中膝栗毛』で、二人が沼津で愉快なことをした話を思い出した。当地での弥次郎兵衛と喜多八の愉快な出来事とは、千本松原の景色を喜多八が狂歌に詠んだこと、及びその狂歌を途中から一緒に歩いていた武士に感心されたこと、二人が護摩の灰―旅人に扮した泥棒―について武士と頓珍漢な会話をしたことなどである⁽⁸⁾。この記述から充真院が『東海道中膝栗毛』を読んでいたことが窺われる。教養豊かな充真院だからこそ、かつて書物で読んで知っていたその現地で、思いをはせる楽しみを味わうことができたのである。

ところで、充真院が見た沼津の千本松原は当時から景勝地として名高い。千本松原は『東海道名所図会』にも紹介されている⁽⁹⁾。黒松がはるかに続く千本松原は、当地の乗運寺住職増譽上人が潮害除けとして植えたことが起源と言われている。東海道を上る際に松並木の右に富士山を遠望でき、左には駿河湾が広がり、その元には白い砂浜が沿った白砂青松の絶景である。しかし、充真院は千本松原の景観について記していない。その理由は次に続くように体調不良であり、景色を愛でるどころではなかったからであろう。

④ 体調不良

原文 とにかく気分悪く、やま越も済しまま、ちと歩行せよといわれけれど、あゆむ心もなくて、又歩行すれば、泊りにおそふ着す、不都合と思ひ、まつまつ駕籠に乘て行、原といふ所にやとりぬ、けふは天気もよく七ツ比に着、此やとは広くきれゐにて悦、着も早きゆへ、納戸初道中計のやとひに申附候面々に逢、富士山もよく見ゆるといひけれど、

眠気悪きゆへか少しも見へず、とふそとふそ見おさめ故、見度と思ふのみ残念に思ふ、此宿の庭よくそうして、小石を水の様に筋付有おもしろし、此時分はめいと悪くて何事もとめず、程へて残念ゆへ、書しままちかひし所も多からん、

現代語訳 駕籠に乗り揺られていると、とにかく気分が悪くて堪らない。「山越えが終ったので、少し歩いてはいかがですか」とお付の者から声をかけられたけれど、歩く気持ちになれない。さらに、私が歩くと宿泊する予定の宿に到着するのが遅れて都合が悪いとも思い、このまま駕籠に乗って進むことにした。今晚は原という宿場で宿泊する。今日は天気が良く午後四時頃に原の本陣に到着した。この本陣の室内は広くきれいなのでうれしく喜んだ。到着が早かったので、私は納戸役をはじめこの旅のためにのみ雇用した者たちと面会した。富士山が良く見えるというが、私は眠たくて目が霞んでいるためか少しも富士山が見えない。「どうか、どうか延岡に転居してしまえば、富士山を見ることもないの、見納めとして是非とも見たい」と願ったが、私の目では見ることが叶わず残念でたまらない。本陣の庭は掃除が行き届き、小石を敷きつめて流水のように模様を付けた枯山水を設え風情がある。夕方になり薄暗くなると、視力がたいへん落ちて何もよくは見えない。この文章をしたためている現在、既に旅から月日を経てしまい、残念であるが記載した内容に間違いが多いかもしれない。

解説 駕籠は必ずしも楽な乗り物ではない。狭い空間に座り、かつ揺れるので、時々駕籠から降りて歩く方が体のためには良い。充真院に歩くことを勧めた人物の名前は具体的に記載していないが、駕籠の横に付き添っている泰三郎であろう。原には本陣が一軒あり、渡辺平左衛門と称す⁽¹⁰⁾。この本陣は御殿暮らしの充真院が喜ぶ程なので、実に立派な室内だったのである。しかも、庭には水の流れに見立てた石庭まで設えてあり、充真院は風流な様子に感心した。

ところで、充真院は富士山を見納めする機会を逸したと悔やんでいる。充真院がこれまで住んでいた江戸からは、富

士山が遠望できる。江戸、関東、東国を離れるということは、富士山との別れでもあると充真院は認識していた。それは「見おさめ」という表現から窺われる。本陣に到着した後、時間の余裕があったので、充真院が身の周りの品物などの調達をしてくれる男性の家臣である納戸役や、この旅のためにのみ雇用した庶民の下働きの者たちに面会することにしたのは、これらの者たちに労う言葉をかけるためであろう。充真院の気配りの表れである。面会した者たちは、充真院の心遣いを畏れ多く、ありがたく感じたことであろう。充真院の目の具合についての記述も度々あった。昼間は眠気ゆえか霞み、夕刻はよく見えないとのことで、年齢相応の白内障、さらには鳥目の症状である。

さらに、この日の記述の末尾に、月日を経ってから執筆したので間違いが多い可能性を記している。前述したように、充真院は旅の様子を備忘録に書き留め、延岡に到着してから文章化している。十一日については備忘録の記述が十分ではなく、その配置に乱れもあったのだろう。後に備忘録をめぐり、旅を思い出しながら文章をしたためたが、自信がない箇所もあったのである。充真院は身近な人々を読者と想定してこの紀行文を作成しており、間違いがあるかもしれないことを素直に表明している。ここに良心的執筆者としての充真院の姿勢が表れている。

二 駿河国の名所と名物

① 四月十二日 (七日目) 名所の松原と左富士

原文 原本陣立出、少し行て気分少しは宜敷成しまま、朝之うち歩行せはやと思て松原を行とおもしろからず、松の陰をとふ哉と思ひてまたき抔しければ、人々なせに大またにせしといわれてとふかと思て也といひ抔しぬれば、気色のよきを見る所でもなく、夫よりはやはり駕籠の方ましならめとのりて行に、直に柏原といへる小休に着し、富士薄く見ゆると知らせせれと中々みへす、きせ川橋と知らせられ、何かこたこたしたるつまらぬ小橋有、元のきせ河橋は是より

右手の少し奥成よし、名残に不二山よく見へたらはとよからんと思ひつつ、原宿のうちにて少々の間、ふし左手に見ゆる所之田畑之気色よく、見へぬ目のおしく思ひ思ひてなみ松を過、

現代語訳 原の本陣を出発して少し進むと、出発時にはあまり良くなかった私の体調が快復したので、「朝のうちに駕籠から降りて歩こう」と思い、松原に沿って眺めながら歩いてみたが面白くなかった。では、松原の中に入り木陰を歩くとどうだろうかと思ひ、地上に出ている松の根を跨いで歩いたが、御付の者から「なぜ、大股で歩くのですか」と言われたので、「松原の中ならば景色が良だろうと思つたからです」と返事をした。実際に歩いて確認したけれど、この松原に景色の良い所は無かった。それならば、わざわざ歩かずに駕籠に乗っていた方が良いと思ひ直し、駕籠に乗り込んだ。すぐに間の宿である柏原に到着して休憩した。御付の者が「ここから富士山が薄く見えます」と教えてくれたが、私の視力ではなかなか富士山が見えない。さらに御付の者が「木瀬川橋があります」と知らせてくれたが、その橋はなんだか趣がなく取るに足らない小さい橋だった。この橋は架け替えられた橋であり、元の木瀬川橋はここよりも右手の奥の方に架けられていたという。「富士山のある駿河国を歩く名残として富士山が少しでも見えたら良いのに」と思ひながら進んでいると、原とその次に位置する吉原の間で、ほんの少しの間であるが富士山が左側に見え、その周辺の田畑と共に景色の良い場所に出た。私の視力でははっきりとは見えないのが残念であると思ひながら、松並木の道を進んで行った。

解説 この日、出発時は充真院の体調があまりすぐれなかったものの、程なく体調が良くなったので駕籠に乗らず歩いた。早朝ゆえ空気がさわやかで、昼間よりも人の往来が少なく、歩くには最適であっただろう。まず、充真院は松原に沿って歩いた。これは一本松村の松原である。充真院が松原を自らの足で歩いたのは、『東海道名所図会』に挿絵と短歌を添えて掲載された著名な景勝地であることを知っていたからであろう⁽¹¹⁾。しかし、充真院はあまり楽しんではいな

い。その原因は、当日の天候であろう。富士が薄く見えるということは、天氣が曇り、または晴れていたとしても空気が霞み、空が白っぽい色なのであろう。したがって、空に加えて海の色も鮮やかな青色ではなく、どんよりと灰色がかっていたはずである。ゆえに青空を背にした富士山と、青々とした海原が松原の背景にある絶景を見ることができなかったのである。

さらに、充真院がわざわざ松原の中に入ってしまったのは、風光明媚な景色を目にすることをとおおいに期待していたので、諦めきれなかったからである。しかし、松が生い茂る下は、地表にごつごつと出ている松の根を超えながら歩くこととなり、足元に注意するため視線は常に下向きであり、しかも、足を高くあげて根を跨いだり、根を踏み越えなければ進めなかった。それでも充真院が必死に歩いたことが窺われる。充真院は大股で歩かざるをえず、着物の裾が乱れてしまい、とうとう御付の者たちに怪訝に思われてしまった。

間の宿である柏原で充真院は茶屋本陣に立ち寄り休憩したはずである⁽¹²⁾。当地は富士の景観が見所であるが⁽¹³⁾、残念ながら視力に支障が無い御付の者にも富士は薄く見えるのみであった。

この日の記述にはさらに景勝地が続く。それは次の宿場である吉原の手前の左富士が見える地である。東海道を上る場合、富士は右側に見えることが多いが、左富士とは富士山が進行方向の左側に見える稀な景観であり、名所として知られる。左富士は相模国茅ヶ崎の南湖の鳥居戸橋付近（藤沢の宿と平塚の間、平塚に近い）や⁽¹⁴⁾、駿河国の吉原付近が著名である。吉原付近の場合は、東から西に向かう東海道が右曲して北に向かう辺りで左富士が見える。相模国の左富士は、歌川（安藤）広重の錦絵「五十三次名所図会」の「藤沢 南湖の松原左不二」（安政二年・一八五五）、駿河国吉原の左富士は「東海道五十三次」の「吉原 左富士」（天保四・五年・一八三三・一八三四）に描かれた珍しい見所といえる景観である⁽¹⁵⁾。吉原の左富士は『東海道名所図会』でも紹介されている。吉原の左富士は、かつて災害のために吉

原の宿の位置を移動して街道を内陸にしたため、街道が北向きに曲がり左富士の景観になったという。充真院は相模国の左富士に関しては記載しておらず、この旅では見ていないようである。したがって、充真院が人生で初めて左富士を眺めたのが吉原であった。充真院は街道の周りの田畑の美しい景色と共に左富士を見ることができた。もともと、充真院の目の状態では遠景となる富士山は霞んで見え、そのことを惜しく思っているが、稀なる富士の位置の景色を目にすることができ、感動したことであろう。なお、充真院は富士山の表記を、「富士」、「不二」、「ふし」と様々に記した。

ところで、この日の記述には一考を要する箇所がある。それは「きせ川橋」についてである。柏原付近に「きせ川橋」が存在しているように充真院は記述しているが、これは沼津の「木瀬川橋」のことではなからうか。沼津の東海道沿いの中級河川の黄瀬川には、木瀬川橋が架けられていた。木瀬川橋は長さが三十六間（約六四、八m）、幅が二間半（約四、五m）の板橋で、欄干を備えていた。この橋が流出した際には、十間（約一八m）程川上に仮橋を架けたという¹⁶。当時、幕府は防衛の面から大河川に橋を架けることを許さなかったが、中小の河川には橋を架設することができた。東海道の富士川や大井川には橋は無い。したがって、橋が架設してあること自体が珍しく、見所でもある。それゆえ、御付の者は木瀬川橋が見えた際に充真院に知らせたのであろう。木瀬川橋の記述は旅を終えてから「五十三次ねむりの合の手」を執筆した際に、本来は沼津の宿に到着する前の箇所に記載すべきところを、沼津よりも後の柏原付近に誤って混入したのであろう。前日十一日の記述の末尾に、「書くままちかひし所も多からん」と誤記があるに違いないと記したのは、まさにこの木瀬川橋のことである。備忘録を見ながら執筆する際に疑問が生じて迷い、考えぬいたものの、正しい位置に配置することができなかったのである。

② 西倉沢の茶店

原文

我杯は一段高き座敷に上る、此辺にては鮑・さきゐのつほ焼名物との事なから、あまり風味もよろしそうにも見へず、少しきたなけに見へしままたへず、夫に気分悪くうつうつと致居、此家は中二階のやうに作しまま、下よりは高く、庭に子供の遊び居しまま少々くわしをまき遣しければ、次第に多く成て、まけまけと云ゆへ、うるさく成しまま、障子べ切と足場迄登る、こまり物といひつつ此所立出行と、江戸より彦根へ御荷物とをりし故、市右衛門逢て桜田御立の様子尋しかは、貞鏡院様先十五日比之御発駕、弥八代様にも御りゑんにて御同道に御立との咄しの由、誠におとろき入し、道中にても聞ものと思ひ、いと哀に物うく、此辺は旅人も稀にて、家居少々つつきたり、ここを立出少しすると坂有て、日も夕刻に成行は、虫之声なし珍らしく聞つつ行は、興津の本陣に着、市川新左衛門也、爰はおきつ鯛名物、好る品ゆへ沢山に整行、

現代語訳

私たちは休息をとることにした茶屋で、一段高く造られた座敷に通された。当地は鮑や栄螺の壺焼きが名物である。しかし、眺めたところあまり美味しそうではなく、さらに少し不衛生そうに見えたので、食べなかった。その上、私は気分が悪くなったので、部屋で少しばかり眠りながら過ごした。この茶屋の私たちが居る部屋は中二階のやうに造られており、窓から覗くと地面よりも高い。庭に子供が遊んでいるので、少しばかり菓子を窓から撒いて与えたところ、次第に子供が多く集まり、口々に「撒け、撒け」と口汚く言う。騒がしいので私はお付の者に窓の障子を閉め切らせたところ、子供たちは建物の足場までよじ登ってきた。私は御付の者たちと「困ったものですね」と言いながら茶屋を出発した。街道を進んでいると江戸から彦根に向けて荷物を運んでいる井伊家の者たちが、後からやってきた。市右衛門を井伊家の者たちの所に行かせて、江戸の桜田の上屋敷を出発した理由などを尋ねた。井伊家の者によると、貞鏡院様―亡き直弼の側室―がまず十五日頃に江戸を発ち、弥八代―正しくは弥千代。直弼の次女―が離縁した上で貞鏡院様と一緒に彦根に向かうというのである。このことを知り私は本当に驚いてしまった。それにしても、旅先で実家

の動向を知ることとなった奇遇に驚き、さらにその事情についてたいへん気の毒で心が鬱いだ。

この付近は旅人も稀にしか歩いておらず、街道沿いも家が少し続いているだけである。ここを少し行くと坂道になった。時刻が夕方になり、虫の音が響くのを珍しく耳にしながらいくと、興津の本陣・市川新左衛門に到着した。当地は興津鯛が名物である。私は興津鯛が好物なので、御付の者に手配させて興津鯛を沢山購入した。

解説 駿河国の東海道は海辺の地が多い。したがって、海産物が名物で休憩の際に海の幸を楽しむことも旅の楽しみである。西倉沢で休憩した茶屋で通された部屋は、中二階の様な部屋であったと充真院が記している。傾斜した地に建てられている様子から、これは西倉沢の茶店として名高い望嶽亭である。海に臨み崖造りで立てられた望嶽亭は、『東海道名所図会』に「薩埵山東麓西倉沢茶店」と題し、見開きで建物と周辺の家や富士と共に描かれた名所である。充真院が招かれた部屋は、窓から海と三保の松原や富士が目の前に広がる「道中無双の景色」と称えられた絶景が有名である。『東海道名所図会』によると、「栄螺、鮑を料理して賣う」ことでも知られる⁽¹⁷⁾。充真院は名物の鮑や栄螺の壺焼きを食べることを期待していたのであろう。しかし、目にした鮑や栄螺の壺焼きは、充真院の期待にそえない品で、残念に思ったことだろう。

充真院はこの転居の旅先でそれぞれの地で出会った子供について書き留めた箇所がいくつかある。子供好きだからであらう。しかし、当地では子供たちのあつましさに閉口することとなった。望嶽亭の崖造りの柱からよじ登ってきた腕白で騒がしい当地の子供たちに、充真院はうんざりしながら茶屋を立ち去っている。

その後、思いがけず彦根に向かう井伊家の荷物の通行に出会い、充真院に同行していた御里付重役の大泉市右衛門明影⁽¹⁸⁾が出向き事情を伺ったところ、井伊家の貞鏡院と弥千代が当家の城付地である彦根に転居することを知った⁽¹⁹⁾。貞鏡院は直弼が彦根の埋木舎に居住していた頃からの側室で、直弼が直亮の世子となり江戸に転居するに伴い江戸に移

った。弥千代は彦根で生まれ、すぐに母と共に江戸に移ったので、彦根で生活した記憶はない。なお、弥千代は既に安政五年（一八五八）に高松藩世子松平頼聰に嫁しており、文久三年四月当時は藩主夫人であった。弥千代は頼聰と離縁して彦根に移るというのである。なお、離縁をした日は四月十六日である。充真院は江戸を旅立つ際に二人の転居について全く知らなかったもので、たいへん驚いたのである。自分と同じ様に、実家の義理の妹と姪が江戸から転居しなければならなかったこと、さらに弥千代は離縁までして彦根に移ることに、充真院は心を曇らせている。尤も、貞鏡院はかつて彦根で生活していたので、旧知の場所に戻るのである。充真院が見知らぬ延岡へ転居するのは、心情的にはいささか異なっていたと思われる。充真院は井伊家の女性たちの動向を知り、同情して心を痛めたためであろう、その後、興津の宿の近くに至るまで、街道沿いの景観―例えば難所かつ絶景の地として著名な薩埵峠―についての記述が無い。なお、弥千代は明治五年（一八七二）七月十日に松平頼聰と復縁した。

夕方になり興津の宿が近づく、充真院は辺りに響く虫の音に耳をすましている。旅情を感じたであろうし、鬱々とした心に虫の音がしみいるような心地だったのではなからうか。興津名物の興津鯛とは甘鯛の干物のことである。甘鯛を腹開きにしてよく洗い、胸骨と背骨を除去して塩漬にした後に日干にした品で、形が美しく、かつ美味で知られる高級品である⁽²⁰⁾。興津鯛が好物である充真院にとって、現地でこの品をたくさん購入して土産に持ち帰ることはささやかな喜びであった。

③ 四月十三日 （八日目） 名物の木地細工と小吉田寿司

原文 天気、興津を立出、江尻、小休。小吉田、小休。稲葉源右衛門、此宿は広からず、上り口より直に上段有て、夫に色々の品ならへあり、木地物細工多、好なる品もあれと、荷に成しゆへ、たはこ盆・たにさく入のみ持行、ここは

小吉田すし名物の由、小なるおけに入て有、此宿は庭のおもしろきまま書ぬ、用所へ行には敷石をとをりて石之橋有、軒と同じやうに屋根有、雨風にもいとみなし、

現代語訳 晴れ。興津の本陣を出発してから、江尻で小休憩をとり、さらに小吉田でも少し休憩した。休憩をとった稲葉源右衛門の宿は広くはなく、上がり口からすぐの箇所の上段の間がある。その部屋には様々な品物が並べてある。特に木地細工の品が多く、私の好みの品物もあるけれど、購入すると荷物が増えるので、煙草盆や短冊入れなど嵩張らない品だけ入手した。ここは小吉田寿司が名物である。小吉田寿司は小さい桶に盛り付けてある。この宿の庭は趣があるので、その様子をそっくり挿絵として描いた。戸外に設けてあるお手洗いに行くには、敷石の上を歩いて石橋を渡る。お手洗いに行くまでの経路には、軒と同じ様に屋根があるので風雨の時でも煩わしく無い。

解説 興津を発ってから、立場の小吉田で小休憩をとった。休憩した家は鮓屋稲葉源右衛門である(21)。この家で販売のために陳列している当地名産の木地細工の中に、充真院の目に叶う品があった。充真院は煙草盆や短冊入れなど身の周りで使う品を土産として選んだ。旅を終えてから御殿での生活において、これらの品は充真院の日常に寄り添ったのであろう。小吉田の名物である寿司とは、小さい桶に白梅酢を混ぜた御飯を入れ、その上に山海の素材を乗せたちらし寿司である。

充真院は稲葉源右衛門家を自らが見た範囲で、部屋、庭、廁などを挿絵に描いた。挿絵から確認できることをふれておこう。玄関は横に広く、充真院が文章にしたために直接、上段の間が続く。上段の間の隣にある次の間も、玄関から直接あがることができる。充真院が趣があると感想を持った庭は、建物に近い方に池があり、その向こうに大きな石や雪見灯籠を配した築山があり、松やその他の樹木が植えてあった。

三 大井川の川越

① 賑やかな府中

原文 府中の昼、望月次左衛門、此宿は広くして座向にいろいろなるぬり物かさり有、上なる品物、賑やか成町にて繁昌之所ゆへ、江戸にてとうらくほうつ聞度と思へるか、其事都合あしくて一度も聞ず居候との事にて、庭にて何そいひて聞せよといへは、木魚をたたきいろいろよくしやへり候、まり子小やすみ、ここを立出、宇津宮にかかりし所、殊之外けはしき峠にて、今迄誰も此山の事いわされは知らて居、箱根之事は高山と思へるか、けはしき事、此山の方かと思、人々あまり駕籠にてはたいくつにもあらん、少し歩行せよといわれしか、宿場は人込、松原はおもしろからず、まつまつかこの方よくと思ひ、例のいねふり、此後の所おほへす、余り駕籠わきにては誰も物いわす静ゆへ、猶々ねる計とわらひぬ、是より岡部の泊りとおしうつりぬ、中野九兵衛、

現代語訳 府中の本陣・望月次右衛門で昼休みをとった。この宿は建物が大きく、室内は広く、部屋には様々な塗物が飾ってある。これらの塗物は上質な品である。府中は賑やかな町で繁盛しており、私が江戸で聞きたいと思ひながら都合がつかずに未だ聞いたことがない「とうらくほうつ」が町に居るといふ。そこで、この者を望月家の庭に呼び「何か聞かせてください」と声をかけると、木魚を叩きながら賑やかに阿呆陀羅經などを披露してくれた。

府中を出発してから、間の宿の丸子で小休憩をしてさらに進むと、宇津ノ谷峠にさしかかった。宇津ノ谷峠はたいへん険しい峠である。私は今迄、誰からも宇津ノ谷峠について聞いておらず、どのような峠なのか知らなかった。既に通過した箱根は高い山だが、険しさは宇津ノ谷峠の方だと私は思った。御付の者が、「ずっと駕籠に乗ってはいたいくつでしょう。少し歩いてはいかがでしょうか」と私に声をかけてきた。しかし、これまでに通過した宿場は人々が多かったし、松原には趣がなかったことを思い出した。そこで、とにかく駕籠に乗っている方が良いだろうと思い、駕籠の中

で居眠りをしていた。そのため以後、通過した場所について記憶していない。私の駕籠の脇に付き添っている者たちは誰も話しをせず静かなので、「ひたすら寝るばかりである」と一人密かに笑った。その後、岡部に向かい、本陣・中野九兵衛に到着した。

解説 府中はたいへん賑わっていた。当地には本陣が二軒あり、充真院が休憩に訪れた本陣は、上伝馬町の望月治右衛門の宿である。この宿は間口十五間（約二七m）、奥行二十数間（約三六m）、面積は三五〇坪であったという⁽²²⁾。休憩した本陣の建物が大きいことや、室内の広さについて記述しているのは、間取りに興味を寄せている充真院らしい視点である。さらに、部屋にいろいろな塗物が飾ってあることにも注目している。望月家の広い庭に呼寄せて充真院が見たという「とうらくほうす」とは漢字で表記すると「道楽坊主」であろう。「道楽坊主」とは大道芸の願人坊主の一種で、木魚を叩きながら阿呆陀羅經を唱えるおぼくれ坊主のことと思われる⁽²³⁾。

宇津ノ谷峠を充真院が知らなかったことは、意外でもある。知らなかったためか、「宇津ノ谷峠」と記すべきところを「宇津宮」と誤記している。さらに、人から聞いていなかった、ということから、東海道についての知識は書物の他に周囲の人たちからも聞き得ていたことが確認できる。充真院は宇津ノ谷峠の傾斜の厳しさは箱根以上であると感じた。峠越えの後、御付の者から駕籠から降りて歩くことを勧められたが、充真院はこの日の宿泊地である岡部までひたすら駕籠の中で居眠りをして時を過ごした。題名である「五十三次ねむりの合の手」の「ねむり」の行為を重ねたのが、駿河の地であった。

ところで、岡部で宿泊した本陣を、充真院は中野九兵衛と記している。しかし、当地の本陣は内野九兵衛・仁藤清左衛門の二軒で、中野甚兵衛と称す脇本陣がある⁽²⁴⁾。充真院は内野九兵衛と記載すべきところを、脇本陣の中野甚兵衛の苗字である「中野」と混同したのであろう。

② 四月十四日 (九日目) 大井川を渡る

原文 岡部を出て、藤枝、小休、三軒や小休、嶋田昼、大久保新兵衛、此辺の気色は田の向に小家有て、松はらにも百姓やおりおり有、今迄のうちに一番よくと思ふ、大井川はいかならんと安事つつ行に、川前に役人出て世話する故、川と思ひし所、何かこやこやしてかけ行、右之方は大き成河原にて、左の方には長く仮橋のくひ見ゆ、何と聞は上様の御通りの時は橋板かけ候よし、少し板の有所も有し、此かり橋五十間計もあらんか、今跡より大せい来るは地へ着たる物ぬきすてし、皆川越也、河原にれん台有にかこをのせれば、今の人両方に十二人つつ居、のせしといいつれと、長をまき、むりにかこの跡にのりし由、段々渡し末に我のれるれん台をかつき上げ、かこの廻りを用心の為ならん、わいわいといふて手をひろけ附て行、皆は少し下之方段々渡り行、のほり立有は此方むれを渡す印の由、水も思ふより少しにて腹迄、心安く思へとも上より見おろすと、はるかの下の方に見へし、もし落されし時は余程間有ゆへと思へは心地もよくなく、兼て聞しよりは河原多て、川ははさのみにもなく、三瀬に成て有と聞しかと、一瀬計にて嬉しく、かた車にて渡るも有、またさつとしたるれん台に兩人つつ乗て渡せるも有て、我かこよいよいといふて向河原へおろす時は、ずつと地にめり込かと思ふ様にて悪心地、河原に渡さる迄かこをおろして見て居、川越は帰りには浅き所を遊び遊びで帰る、

現代語訳 岡部の宿を発ち、その後、藤枝と三軒屋で小休憩をとり、島田の本陣・大久保新兵衛で昼休みにした。この周辺の景色は田の向こうに農民の小さい家が見え、海辺の松原にも百姓の家があちこちに建っている。これらの景色はこれまでの道中で目にした中で一番良い風情であると思はれる。大井川は通行できるだろうかかと心配しながら進むと、こちらの河原に役人が待機しており世話をするという。川の辺りには何か取り込んでおり人が走っていく。川に向かって右側は大きな河原が広がり、左側は仮設の橋を架けるための杭が向こう岸まで長く連なっている。どのような時にこの

杭に橋を架けるのか尋ねると、將軍が通行する時であるという。少しだが杭に板を架けている箇所もある。ここに架ける仮橋は、長さが五十間（約九〇m）にも及ぶだろう。

仮橋の杭を眺めていると、後からやってきた大勢の人たちが、着物を地面に脱ぎ捨てた。これらの人々は川越人足である。河原に置いてある連台に駕籠を乗せると、川越人足が二手に分かれて駕籠の両側に十二人ずつ付いた。そして川越人足らが「乗せます」と言っただけで、御付の女中である長尾とまきは駕籠の中ではなく、無理に連台の駕籠の後の空いている所に乗った。御付の女中らの駕籠を先に川越させてから、最後に私が乗っている駕籠の連台を川越人足らが担ぎ上げた。駕籠の周りを用心の為であろうか、「わいわい」と川越人足らが声をあげながら手を広げて付いてきた。先に渡った者たちは、私よりも下流の方を次々に進んで渡っている。幟旗が立ててあるところは、大勢を通行させる場所の目印である。川の水深は想像していたよりも浅く、川越人足の腹ぐらいまでである。安心したものの、連台の上に乗せた駕籠の窓から私が見下ろすと、川面ははるか下の方に見える。「もしも川の中に落されてしまったら、川面までかなりの高さがある」と思うと心が落ち着かない。

大井川は以前から聞いて想像していたよりも河原が広いばかりで、川自体はさほど大きくはない。川は三筋に分かれて流れていると聞いていたが、私が訪れた時に川は一筋だけであり、川を容易に渡れて嬉しかった。川を渡るには、人足が客を肩車したり、ごく簡素な連台の場合は一台に二人ずつ乗せる。私の駕籠を乗せた連台は、川越人足が「よいよい」とかけ声を出しながら川を渡った。向かいの河原に到着して地面に降ろす時には、「ずん」と地面にのめりこむかと思うばかり乱暴に扱われ、私は不快に感じた。私を運んだ川越人足たちが対岸の河原に戻るために川を渡る様子を見ると、先程よりも水深の浅い所を選びながら仲間と遊びながら渡っていった。

解説

本陣は藤枝に二軒（青島治右衛門、村松伊右衛門）、島田に三軒（松村九郎治、大久保新右衛門、置塩藤四郎）

ある⁽²⁵⁾。充真院は昼休みに立ち寄った島田の本陣を「大久保新兵衛」と記しているが、正しくは「大久保新右衛門」である。当家は島田に三軒ある本陣のうち、中本陣である。三軒屋は藤枝と島田の間に位置する間の宿である⁽²⁶⁾。藤枝の鮫や鰯の皮を用いた細工物や、藤枝と島田の途中にある立場の瀬戸の茶店で販売されている染飯などの名物について充真院は全くふれていない⁽²⁷⁾。一方、島田付近の田の向こうに農民の家、さらには海を背景に松原の彼方に庶民の家がある景色をたいへん気に入り、ここまでの旅で見た景色で一番であると述べている。これまで江戸で人生を過ごした充真院にとって、非日常の存在である田や海、庶民の小さな家などの鄙びた風景は、おおいに心魅かれるものであった。

東海道の難所として知られる大井川は、架橋や渡船が許されておらず、川越人足による徒渉―肩車や連台―や馬越のみであった。充真院らは幸い天候にも恵まれ川の水量が適切で、川留めにあうことなく無事に通行した。「役人」とは川会所の川庄屋のことである⁽²⁸⁾。

充真院は河原で將軍の通行のために架けた臨時の橋の杭を目にした。杭に板が架けられている箇所もあったという。文久三年二月二十三日に十四代將軍徳川家茂が上洛のために大井川を渡っていた。充真院よりもおよそ一ヶ月半前のことである。しかし、その折に家茂は大井川を連台で渡り、仮設の橋を利用しなかった⁽²⁹⁾。

大井川の河原の広さや川の水深を充真院は自らの目で確認している。さらに、充真院は駕籠ごと連台に乗り川を渡った際に、高さがかなりあることに気付き心配しているが、これは駕籠の窓を開けて覗いたからである。連台で川を渡るという稀なる体験だからこそ、好奇心豊かな充真院はしっかりと見ていたのである。大井川を渡り終えてからも、川越人足が対岸に戻っていく様子を振り返って眺めた。川越人足は連台で運ぶときにはあえて水深が深い箇所を通り、一方、対岸に戻る時には浅い所を通ることを確認している。大井川を無事に渡った充真院一行は、駿河国から遠江国に足を踏み入れたのである。

註

(1) 「五十三次ねむりの合の手」は明治大学博物館が所蔵する内藤政道氏寄贈書の中の一冊である。架号は充真院（繁子）関係（I）一二。当史料は『内藤充真院道中記』（宮崎県立図書館、平成六年）や『内藤家文書増補・追加目録 八 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子道中日記』（明治大学博物館、平成十六年）で翻刻されている。本稿作成に際し、原文掲載の箇所については原本を確認した。

(2) 四月十一日の宗閑寺での休憩、三嶋大社、三島、十四日の大井川と川越えについては、先行研究である伊能秀明・小倉葉子・永田由香利・桑原理恵「現代訳『東海道五十三次ねむりの合の手』のおかしみ―幕末期大名家夫人の気ままな旅日記の世界―」（『図書の譜 明治大学図書館紀要』第十六号、平成二十四年）でも現代語訳を試みているが、私とは文章の区切り方や解釈が異なる箇所があるので、本稿で翻刻の対象にした。なお、四月十二日の記述のうち富士川、岩淵、蒲原、倉沢の海辺の景色については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」小稿」（『城西人文研究』第三四巻、平成三十一年）の一三九―四〇頁に現代語訳と解説を掲載したので、本稿では対象から外した。外した箇所は本稿二の①と②の間に相当する。

(3) 山中新田、及び後述の宗閑寺については『三島市誌』中巻（三島市誌編纂委員会、昭和三十四年）の四八〇―九〇頁に説明がある。

(4) 笹屋は笹屋助左衛門家という。当家については『三島市誌』中巻の四八〇頁、四八九頁、四九三―六頁に詳しい。

(5) 『三嶋大社（略史）』（三嶋大社、平成二十六年）、五八―九頁、一〇〇―一頁による。

(6) 三嶋大社の境内の様子は当時の著名な地誌である『東海道名所図会』巻之五に詳細に描かれている。その箇所を『新訂 東海道名所図会（下）』（「新訂 日本名所図会集 三」）ぺりかん社、平成十三年）で示すと、九七―九

頁である。この挿絵と比較すると、充真院の簡略な境内図が正しく描かれていることが確認できる。

- (7) 佐久間泰三郎恭明については、明治大学博物館所蔵内藤家文書の「下士以上由緒書」(架号、第一部・三〇由緒分限・五) 九巻による。

- (8) 沼津での弥次郎兵衛と喜多八の愉快な話は、『東海道中膝栗毛』(日本古典文学全集 四九、小学館、昭和六十年) の一二五〜七頁にある。

- (9) 千本松原については『沼津市史』通史編 近世(沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会、平成十八年)の三八一頁に沼津から原まではるかに続く景勝地であることが説明されている。『東海道名所図会』では『新訂 東海道名所図会「下」』の八一〜八頁で紹介されている。

- (10) 原の本陣渡辺平左衛門については、大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』(丸善株式会社、昭和十七年) の六一頁による。

- (11) 『東海道名所図会』巻之五に挿絵として描かれた一本松村は、東海道に沿って松原が続き、南側は駿河湾を臨む風光明媚な土地である。さらに『東海道名所図会』の挿絵には「わたつ海の波にもぬれぬ浮島は松にこころを寄せて頼まん よしのぶ」と、『拾遺和歌集』の能宣の短歌を添えている(この短歌は『拾遺和歌集』(「新 日本古典文学大系 七」岩波書店、平成二十五年)の一三〇頁に収載されている)。当地と松原については、『新訂 東海道名所図会「下」』の六六〜七頁による。

- (12) 柏原は新田とも称する間の宿であると『富士市史』上巻(富士市史編纂委員会、昭和四十四年)七九六頁に説明がある。なお、柏原には茶屋が九軒あり、茶屋本陣は京都に向かって左側にある三軒の中央にあることが、鈴木富男著『目でみる富士市の歴史』(緑星社出版部、昭和五十年)の七九頁で確認できる。

- (13) 柏原から見える美しい富士は、二代歌川広重による錦絵の「東海道名所之内 柏原左不二」として描かれている。駿河国の左富士は後述する吉原が有名であるが、柏原でも左富士が見え錦絵に描かれていた。右の絵は『目でみる富士市の歴史』八頁に掲載されている。
- (14) 南湖の左富士については『茅ヶ崎市史』五 概説編（茅ヶ崎市、昭和五十七年）の一三八頁による。
- (15) 吉原の左富士については『新訂 東海道名所図会「下」』の六二頁に記載されている。
- (16) 木瀬川橋については『沼津市史』通史編 近世の六八〇九頁、七二頁に橋の形状や位置について記述がある。なお、木瀬川橋については『東海道名所図会』には記載がない。
- (17) 西倉沢、及び望嶽亭については『新訂 東海道名所図会「中」』（『新訂 日本名所図会集 二』）ペリかん社、平成十三年）の三七七〇九頁による。
- (18) 大泉市右衛門明影については、彦根城博物館編『彦根藩史料叢書 侍中由緒帳』十三（平成二十四年）二六五〇七頁による。
- (19) 貞鏡院と弥千代については、吉田常吉『井伊直弼』（吉川弘文館、新装版第五刷、平成十八年）六九頁、八一頁、四一〇頁による。
- (20) 興津鯛については『沼津のひもの・かつおぶし―国指定漁具コレクション 水産加工用具』（沼津市歴史民俗資料館、平成三十一年）一二〇三頁による。
- (21) 鮓屋稲葉源右衛門については、『静岡市史』第二卷（静岡県静岡市役所、昭和六年）の三二二頁による。
- (22) 府中の本陣望月治右衛門については、大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六二頁による。さらに、『静岡市史』第二卷の三一七〇八頁、三三三頁に近世後期における規模や屋敷の見取図、

宿場町における位置などが記されている。

(23) 「道楽坊主」「おぼくれ坊主」「阿呆陀羅經」については、坪内博士記念演劇博物館編著『藝能辞典』（東京堂出版、十九版、昭和五〇年）一八九頁、宮尾與男著『図説 江戸大道芸事典』（柏書房、平成二〇年）一六〇八頁、光田憲雄著『日本大道芸事典』（岩田書院、令和二年）三四〇五頁の記述から本稿のように理解した。

(24) 岡部の本陣については、大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六三頁による。なお、『藤枝市史』上巻（藤枝市史編纂委員会、昭和四十六年）二八四頁と、『藤枝市史叢書十四』静岡県志太郡 岡部町誌（復刻）』（藤枝市史編さん専門委員会、平成二十二年）一五頁では、岡部の本陣は三軒で、内野九兵衛と仁藤清左衛門の他に、中野甚兵衛も本陣と記している。

(25) 藤枝と島田の本陣については、大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六三頁、『藤枝市史』上巻の二八四頁、『島田市史』中巻（島田市史編纂委員会、昭和四十三年）の二七〇頁による。

(26) 三軒屋については、『図説 藤枝市史』（藤枝市史編さん委員会、平成二十五年）の八六頁による。

(27) 藤枝と瀬戸の名物については、註（26）同書の八三頁による。

(28) 川会所と川庄屋については『島田市史』中巻の一八五〇二一四頁に詳しい。

(29) 徳川家茂が上洛のため大井川を通行したことについては、『新訂増補 国史大系 五十一 続徳川実紀 第四篇』（黒板勝美・国史大系編修会、昭和四十二年）の五六四頁の文久三年二月二十三日の箇所、島田で小休憩をした後に「四時過、大井川御連台ニ而 御渡越」と連台で大井川を渡ったと記されている。